

尾崎翠作品における〈少女〉、〈妹〉

——小野町子を中心に——

久保田 真美

はじめに

尾崎翠（一八九六・一九七二）「第七官界彷徨」の語り手は、人間の「第七官」に響くような詩を書くことを目標としている少女・小野町子である。町子は、分裂心理病院に勤める長兄・一助に炊事係として呼び出され、祖母と暮らす家から上京する。東京の家には一助の他に、二十日大根の肥料と蘗の生殖の研究をしている次兄・二助と音楽学校の受験生で浪人中の従兄・三五郎がいる。この祖母や両親のいない「変な家庭」で町子は「第七官」について考え、一助の同僚・柳浩六に恋をする。しかし、この恋は浩六が遠くへ旅立つことによって終わってしまう。

この小野町子は「歩行」でも語り手として、「地下室アントンの一夜」では詩人・土田九作が恋をする相手として登場する。この三作品と「こほろぎ嬢」は、共通の登場人物がいるために姉妹作品とされ、尾崎翠の代表的作品群だ

とされている。

もともと尾崎翠は大正六（一九一七）年頃から雑誌「少女世界」（博文館、明治三十九（一九〇六）年創刊）に多くの少女小説を寄稿していた少女小説家であった。しかし、「第七官界彷徨」をはじめとする代表的作品群は、いわゆる「少女小説」ではない。一方で、尾崎翠作品における〈少女〉や〈妹〉について論じられることは多く、その際に小野町子の存在を無視することは出来ないだろう。本論では、小野町子を中心に尾崎翠的〈少女〉、〈妹〉像を考察する。

第一章 〈少女〉、〈妹〉という存在

第一節 〈少女〉について

〈少女〉という存在は、明治末期から大正期に登場したとされている。本田和子氏は、明治三十二（一八九九）年の「高等女学校令」が〈少女〉を生み出すきっかけになったと述

べている。この「高等女学校令」によって、各道府県に最低一校は高等女学校の設置が義務付けられた。高等女学校の増加に伴い、自然と女学生の人口も増加することとなった。高等女学校とは、女子の中等教育機関として制度化された学校であり、一般科目の他に裁縫などの女子特有のカリキュラムも加えられていた。しかし、当時の女学校卒業後の進路として、進学も就職も決して現実的なものではなかった。それゆえに、女学生は「人生や生活とは無縁の、軽く愛らしく、他愛なく一時を過ごす「特権的異物」」だったのだと本田氏は述べている。

さらに、本田氏は「高等女学校令」公布後に創刊された多くの少女雑誌が〈少女〉のイメージを支えたとしている。「少女界」(金港堂、明治三十五(一九〇二)年創刊)、「少女の友」(実業之日本社、明治四十一(一九〇八)年創刊)、「少女倶楽部」(大日本雄弁会講談社、大正十二(一九二三)年創刊)などが続々と創刊された。少女雑誌にはそれぞれの特徴があったが、どの雑誌も読者からの投書欄が活発であったという点は共通している。少女雑誌の投書欄は読者同士のコミュニケーションの場として機能していた。投書する際に、ペンネームを用いる読者もいた。読者の用いるペンネームは華やかで現実感の薄いものが多かった。そのペンネームは読者を現実から離れさせ、誌上における虚構の存在とさせる

役割を果たしていた。そして、投書欄では読者達独自の共同体が出来上がっていったのだ。本田氏は、それを「少女幻想共同体」と呼んでいる。雑誌『女学世界』(博文館、明治三十四(一九〇一)年創刊)の投書欄を分析した川村邦光氏も本田氏と同様に、雑誌が〈少女〉イメージを創り出したとしている。ただ川村氏は、教育よりも雑誌の役割を重視しているようである。川村氏は、投書欄における読者同士の共同体を「オトメ共同体」と名付けている。両氏ともに、この共同体こそが〈少女〉のイメージをより強固にしたのだと考えている。

今田絵里香氏は先行研究を踏まえて、〈少女〉の定義として三つの要素を挙げている。まず一つ目は年齢である。〈少女〉の年齢は、小学校入学から女学校卒業までの学齢期でなくてはならない。二つ目は、きちんと学校教育を受けていることだ。この場合、小学校教育だけではなく、女学校教育を受けていることが重要となってくる。三つ目は少女雑誌の購読をしているのは都市新中間層の女子だけであり、〈少女〉となりうるのは都市新中間層の女子だとしている。

しかし、この要素を満たしていれば、必ず〈少女〉となるのではないはずだ。今田氏は「少女」とはあらゆる女

子を意味しない」とも述べている。三つの要素を満たしていても〈少女〉ではない者もいただろう。逆に、三つの要素を満たさずとも、〈少女〉となる者もいたはずだ。年齢などの要素よりも〈少女〉となるための重要な要素があるのではないだろうか。

少女雑誌を購読し、投書欄に投書していたのは、学齢期の女子ばかりではなかったはずである。今田氏の挙げる〈少女〉の要素に該当しない者も投書欄における共同体の一角を担っていた。このことは、学齢期の女子ではなくとも〈少女〉になることが出来るということを示しているのだろう。

尾崎翠と同じ明治二十九（一八九六）年生まれである吉屋信子は、少女小説の代表的作家として有名である。代表作『花物語』は短編集であり、当初は七編で完結する予定だったが、最終的には五十二編に及んだ。これは読者の強い要望によるものであり、吉屋信子の作品は〈少女〉達から非常に人気があった。これは『花物語』に登場する〈少女〉達が、読者である〈少女〉達にとって憧れの存在であり、共感することの出来る存在であったからだと考えられている。

『花物語』の第一作目「鈴蘭」⁶は、笹島ふさ子が（自分の幼い頃の出来事である）母親とイタリア人の少女・オルテ

ノとの交流を六人の友人へ語る形式となっている。ふさ子は「ミッションスクール出の牧師の娘」である。もう女生ではないものの、年齢としては学齢期に近いのだろう。ミッションスクールの出身ということは、今田氏の挙げる二つ目の要素も満たしている。また、ピアノの音を「水晶の玉を珊瑚の欄干から、振りおとすような」音と例えるなど、いかにも〈少女〉的な語りをする。つまり、ふさ子は〈少女〉だと言うことができるはずだ。おそらく、ふさ子の話を聴く六人もふさ子と似たような立場の者ばかりだと考えられ、〈少女〉と呼ぶことの出来る存在であるはずだ。

語り手はふさ子だが、物語の主人公はふさ子の母親だといえるだろう。ふさ子の母親は、亡き母のピアノを弾くために講堂に忍び込んだオルテノを見逃した。ふさ子の母とオルテノは、直接会話を交わすことはない。二人の交流は、オルテノからの御札の手紙と鈴蘭の花束だけで行われる。

ふさ子の母親は、牧師の妻であり、町の女学校で音楽の教師をしていた。この母親は、今田氏の挙げる〈少女〉の要素には該当しない。しかし、母親とオルテノの物語をふさ子から聴き終わった〈少女〉達は、「誰ひとり言葉を出すものもなく、たがいに若い潤んだ黒い瞳を見かわすばかり」だった。このように、ふさ子の母親の行動は〈少女〉達に感動を与えた。感動したということは、彼女達はふさ

子の母親に共感したということである。共感するという行為は、〈少女〉達にとって重要だったと考えられる。雑誌の投書欄では、〈少女〉達が互いに共感することによって共同体を生み出していた。〈少女〉達に共感されることによって、ふさ子の母親は〈少女〉に近い存在となつていくのだ。〈少女〉の要素に該当はしないが、この母親が〈少女〉的であることに間違いはないだろう。

〈少女〉とは、年齢などの要素よりも意識の問題なのではないだろうか。高原英理氏は、「少女の意識」について論じている。高原氏によると、「少女の意識」は性別年齢関係のないものだとしている。具体的には、江戸川乱歩や三島由紀夫などの作品にも「少女の意識」が感じられるとしている。また、高原氏は「少女への欲望」ではなく、「少女として語ること」を行っている文学作品として、尾崎翠や森茉莉、野溝七生子などの作品を挙げている。

「少女の意識」は高原氏の述べている通りに、性別や年齢などが関係のないものだろう。しかし、〈少女〉という存在には女性であるという性別の括りが必要となるはずだ。〈少女〉の気持ちに賛同出来る、共感出来る女性こそが、〈少女〉という存在になる、あるいは、近づくことが出来るのだろうか。

第二節 〈妹〉について

『日本国語大辞典』によると、妹とは「男性の側から、姉妹を呼ぶ語。古くは年齢の上下に関らず姉をも呼んだが、のち、年下の女きようだいに限られるようになった」とされている。

柳田國男氏は「妹の力」¹⁾において、明治末期から大正末期にかけての近代の変化を述べている。その中で意外な話として、兄妹の親しみが深くなってきたことを挙げている。兄が成人するにつれて、妹を頼りにして仲よくしていると述べている。柳田氏は、その現象を「興味ある問題である」として述べている。近代以前、妹と兄は軽々しく会話を交わす習慣がなかった。この変化について、柳田氏は次のように述べている。

仮に婦女子が必要も無い謙遜から放免せられ、各自その天性の快活を以て家庭を明るくし、殊には孤独を感じ易い青年の兄たちを楽しませしめるのだとしても、それは結構なる変化だと考へ得る。(「妹の力」)

この兄妹間の変化に対して近親相姦の恐れを感じる人間がいるが、その考えは間違っていると指摘している。柳田氏は兄妹間の交情の底に「若い者らしい又人間らしい熱情」

があつたとしても、これ程無害な異性の力は他にないと述べている。むしろ、肉親愛の復古なのではないかと捉えている。

また、兄妹の宗教上の提携についても触れている。アイヌでは、島や山を占拠した神は必ず兄と妹の一組だと言われている。一方、沖繩では「をなり神」を信仰していた。妹である神女を通じて神の靈に対面していたのだと言う。この「をなり」という言葉は姉妹を意味している。さらに、「妹」だけではなく、女性全般という意味での「妹(いも)」には靈的な力があると考えているようである。

文学の面では、川村湊氏が「大正から昭和にかけての都会風な、モダンステイックな文学運動に、柳田国男の『妹の力』ではないが、『妹の影』といったものが、見え隠れするような気がしてならない」と述べている。特に、「本来ならば最も身近でありながら、手に届かない女性」である「売られた妹」というモチーフが川端康成の作品に顕著であつたとしている。

川村氏のいう「妹」とは「性的な恋慕を禁じられた、最も身近で従順な異性。インセスト・タブーにおおわれた愛憐の対象」である。兄は妹を保護し、他の男へ嫁がせようとする。妹は兄に仕え、兄を慕う。兄にとって妹とは社会的交換価値のある存在であつた。「兄―妹」を中心にした

世界では父母の影が希薄だとも川村湊氏は指摘している。さらに、兄の役割は妹を婚姻の社会的システムに組み込むことだとしている。そうであるがゆえに、「妹」は家庭内の男性に「庇護され、所有される性」であつたと述べている。

山下聖美氏は、古代からさかのぼり、「妹」というキャラクターと兄との関連におけるキーワードを挙げている。一つ目は「兄妹相姦における神聖さと罪の意識(タブー)」だ。二つ目は「兄を助ける靈的な存在としての妹」である。三つ目は「第三者の介在しない、いわば没社会的な二人だけの空間における「妻または恋人」の呼び名」だ。山下氏も、兄妹相姦について言及しており、兄妹婚は神聖さと不吉さの境界領域にあるのだとしている。二つ目は、兄妹という血縁関係がそもそも靈的つながりのあるものだと捉えているようだ。三つ目のキーワードは、川村氏が指摘している「兄―妹」を中心とした世界には父母の影が希薄だということにも関係してくるのだろうか。

大塚英志氏は、近代の詩や文学作品を通して、「少女」や「妹」を論じている。その中で、「性」が形式的に、禁忌されながら、しかしその啓蒙は「兄」の側の一方的な任意に委ねられる者の名が「妹」なのだとしている。やはり、「妹」は兄の管理下にいる存在だと捉えているようである。

〈妹〉は「姉―妹」の関係よりも、「兄―妹」の關係性を論じられることが多い。多くの先行研究でも言及されているように、最も身近な異性でありながら、恋愛の対象と出来ないということが関係しているのだろう。〈妹〉とは、家庭内において特に兄に庇護される存在だと考えられているようだ。

第二章 小野町子について

第一節 「第七官界彷徨」における小野町子

「第七官界彷徨」における小野町子は、自らの容貌を「ひどく赤いちぢれ毛をもつた一人の痩せた娘」だと評している。特に「赤いちぢれ毛を人々にたいへん遠慮に思つて」おり、強いコンプレックスを抱いている。この「赤いちぢれ毛」に関しては、町子の祖母も快く思っていない。兄達のもとへ旅立つ際に、祖母がバスケットへ真っ先に詰めたものは、「びなんかずらと桑の根をきざんだ薬」であった。これは、祖母が「赤毛ちぢれ毛の特効品だと深く信じてゐた」品物である。祖母は「都の娘子衆」と町子を比較し、悲しみ、人間は心映えが一番だと語りかける。「赤いちぢれ毛」をこれ程までに気にする祖母の態度によって、町子はより一層自分の髪にコンプレックスを感じていたのではないだろうか。

彼女のもう一つのコンプレックスは、名前だ。小野町子という名前は、絶世の美女であったとされる平安時代の歌人・小野小町を人々に連想させるからである。それゆえに、町子は「もうすこし私の詩か私自身かに近い名前を一つ考えなければならぬ」と感じている。小野小町を連想させる小野町子という名前は、自分自身にふさわしくないと思っているのだ。

平安時代の美人の条件の一つは、長く豊かな黒髪であった。町子の名前から連想される平安時代の佳人・小野小町も当然そのような髪だったと考えられる。さらに、少女雑誌の表紙に描かれていた理想的な〈少女〉の姿も殆どが黒髪である。「赤いちぢれ毛」の町子は、当時の理想とされていた〈少女〉の容姿とは違う。だからこそ、美しい黒髪を連想させる小野小町に似た小野町子という名前が嫌だったのだろう。また、「私の詩か私自身かに近い名前」という考えは、少女雑誌の投書欄において非現実的なペンネームを用いて、現実の自分と投書欄における自分を乖離しようとしていた〈少女〉達に似ている。

町子と隣人の女学生の交流は、直接の会話ではなく、主に垣根越しの文通によって行われる。このコミュニケーションの取り方は、少女雑誌の投書欄において交流を図っていた〈少女〉達のものである。

また、「まことに若い女の子が祖母や兄や従兄に対して持ちたがる心理」を町子は持っていた。それは、二助の蘇の論文を読み、蘇の花粉に関する知識を持つていることを黙っていた心理のことである。二助の研究テーマは「肥料の熱度による植物の恋情の変化」である。論文には、蘇の受粉の様子や植物の恋愛について書かれている。つまり、そこから連想する恋や性に関する知識があることを祖母や兄、従兄には黙っていたことだろう。二助が町子に対して発情期という言葉を使ってしまう慌てる場面がある。このことから、親が不在の「変な家庭」において町子に対しては、恋や性に関することが軽くタブー視されていたと考えられる。作中では町子によって兄達の恋愛の話が語られている。しかし、町子自身が直接一助や二助から恋の話を書くことはない。全て、一助と二助の会話を耳にするだけか、三五郎からの伝聞だけである。三五郎は別だが、一助と二助は町子に恋愛の話をしないように気をつけていたとも考えられる。

町子は、「二人の兄から「うちの女の子」と呼ばれている。従兄の三五郎は名前で呼ぶことがあるものの、「女の子」と呼ぶことが多い。そもそも彼等は、自らが恋する女性患者も失恋した相手も隣人も全て「女の子」と一括りに呼ぶ習慣がある。「女の子」という言葉は、呼ばれる彼女達か

ら個性を奪っているように感じられる。彼等からしてみると、恋の相手も自らの妹も等しく「女の子」という一つのグループに分類出来るものなのだ。川村湊氏は次のように述べている。

兄たちや従兄にとつて、町子は「妹」や「従妹」というより、「女の子」なのであり、「女の子」というものは、むろん本来は若い男にとつては原則的に「恋愛の対象」となるべきものだ。兄たちにとつて町子は恋愛の対象とすることのできない「女の子」という、特々なカテゴリーに属するのである。

（「妹の恋―大正・昭和の少女文学」）

川村氏は、「恋愛の対象とすることのできない「女の子」という、特殊なカテゴリー」と述べているが、それこそがまさに「妹」という存在になるのではないだろうか。町子はただ「女の子」と呼ばれるのではなく、「うちの女の子」と呼ばれる。この「うちの」という言葉によって、町子は「妹」となり、他の「女の子」との差別化が図られているのだ。

この「変な家庭」の中で町子を恋愛の対象とすることが出来るのは、従兄の三五郎だけである。音楽学校の受験を悲観した三五郎が国で百姓をするといい出せば、町子は「私

も国で百姓をしよう」とひそかに思う。また、三五郎は町子に接吻する習慣を持っている。町子は三五郎と隣の女学生が恋愛をしている間、「ただ悲しみの裡に」過ごしている。このように、町子と三五郎は従兄妹というよりも恋人という関係に近いように思われる。

しかし、町子は「二つのありふれた恋の詩」を恋人に贈るつもりでいるけれども、この二つの詩は机の抽斗にしまわれたままで。町子と三五郎が恋愛関係にあるのならば、この「二つのありふれた恋の詩」は既に三五郎へ贈られているはずである。町子は詩人になりたいという夢を打ち明けても、三五郎へ詩を贈ることはない。

そもそも二人の接吻は「十四の三五郎が十一の私に与へた接吻とあまり変りのないもの」であった。その時は、祖母が軒下に吊るした柿を二人で協力し、上手く取ることに出来たゆえの歓喜の接吻である。この接吻は、明らかに互いを恋の対象として捉えたものではない。二人には「幼いころからいつたいにこんな接吻の習慣をもつてゐた」とある。これは、二人の接吻が文字通りに「習慣」としての意味しか持たない、ということではないだろうか。また、十七の三五郎が十四の町子に接吻しているのを見た祖母は「仲のよい兄妹ぢや、いつまでもこのやうに仲よくしなされ」と言う。親の目から見ると、町子と三五郎は従兄妹で

あり、恋をしてもおかしくはない。しかし、親の目は存在せず、祖母の目から見ると、二人は従兄妹でも恋人でもなく、「兄妹」でしかありえないのだ。

町子はほんのわずかな交流だけで一助の同僚・柳浩六に恋をする。浩六は町子のことを一度だけ「僕の好きな詩人に似てゐる女の子」と呼ぶ。この呼び方は、ただの「女の子」よりも町子に個性を持たせた呼び方であるといえるだろう。しかし、浩六も殆どは「君（一助）のうちの女の子」（括弧内は引用者注）と呼ぶ。この呼び方も、町子が一助の〈妹〉であることに重点を置いた呼び方ではなく、積極的に恋愛の対象とする存在に対する呼び方とはいえないだろう。ここでも、町子は〈妹〉でしかなく、くびまきを買ってもらうだけで町子の恋は終わってしまう。

町子は〈少女〉的であるが、どちらかといえば、〈妹〉としての面が強調されているようである。そのように感じるのは、町子が「うちの女の子」と呼ばれ、それを当たり前のように受容しているからだだろう。「第七官界彷徨」において、町子が〈少女〉的であることは確かであるが、それよりも〈妹〉であることが重要な要素であるようだ。

第二節 「歩行」、「地下室アントンの一夜」における小野町子

「歩行」は「夕方、私が屋根部屋を出てひとり歩いてゐたのは、まったく幸田当八氏のおもかげを忘れるためであつた」という一文で始められている。町子と祖母が暮らす家に一助の同僚である幸田当八が、分裂心理学のモデルを求めて滞在することとなつた。当八の心理研究の一環として、町子が女性役、自身が男性役を担当し、柿を食べながら屋根部屋で恋の戯曲を朗読する日々が続いた。町子は、いつの間にか当八へ恋をする。当八が次の調査地に向かつた後、町子は始終彼のことばかり考えるようになってしまつた。一日中ぼんやりとしていくよう頼まれる。お萩を届けた後、松木家へお萩を持っていくよう頼まれる。お萩を届けた後、今度は松木夫人の弟で詩人の土田九作へお萩とおたまじゃくしを届けるように頼まれる。

町子は幸田当八と屋根部屋で二人きりで恋の戯曲を朗読し続けた。「烈しい恋のせりふ」を交わすうちに、町子は戯曲の役と自身の区別がつかなくなり、当八へと恋をしたのだらう。当八が去つた後、町子は「空漠とした一つの心理」を感じた。台詞の朗読に慣れた口元が寂しく、一人で柿を食べ、餅板に戯曲の台詞を書いたりして日々を過ごしていた。町子は木犀の花が咲いていても、こおろぎが鳴い

ていても、当八のことを思った。当八の面影を忘れるために、風に吹かれたが、むしろ当八の面影を心に吹き込まれたように感じてしまう。町子のこの状態は、明らかに恋煩いであろう。

「第七官界彷徨」の際の町子は、浩六が去つた後、浩六に買つてもらつたくびまきを部屋に飾つた。「われにくびまきをあたへし人は遙かなる旅路につけり」という「哀感のこもつた恋の詩」を書いた。しかし、恋の詩よりも書きたかつたのは、浩六の好きな女詩人が書いたような「風や煙や空気の詩」である。また、外国の詩人の本を集めて、彼女について知ろうとした。浩六が好きだつたからという理由もあるだろうが、町子の関心はどちらかといえば、女詩人のほうにあるようである。

兄や従兄との奇妙な生活や「第七官」への考察を中心とした「第七官界彷徨」と違い、「歩行」は町子の当八への恋を中心に語られている。「歩行」での町子は、詩について考えることがない。「歩行」において、町子は詩人でも、〈妹〉でもなく、恋をする「女の子」である。

浩六は、町子のことを「女の子」や「僕の好きな詩人に似てゐる女の子」と呼んだが、主に「君のうちの女の子」と呼んでいた。当八は町子のことを、ただ「女の子」としか呼ばない。この呼び方の違いが、「歩行」の町子のこと

をより「女の子」に感じさせる。

「地下室アントンの一夜」は、詩人・土田九作、動物学者・松木氏、心理学者・幸田当八が中心となっている。小野町子は直接的には登場せず、九作の回想においてのみ登場する。義兄の松木氏から詩作の参考にするようにと、九作のもとへおたまじゃくしが届けられる。その使者は小野町子であり、九作は町子に恋をする。町子は九作から見ると、明らかに失恋者であり、失恋者のかすかな溜息が九作の心を捉えた。九作は、恋をしている時に恋の詩が書けず、恋をしていない時に素晴らしい恋の詩が書けるような詩人である。そのため、九作は町子が傍に居ることを好まず、幾度も薬局へと使いに出す。九作は失恋している町子へと、「失恋したら風に吹かれろ。風は悲しいところを洗つてくれるだらう」というような詩を贈る。それきり町子と会うことはなく、町子の持つてきたおたまじゃくしを見つめ続けている。

九作は町子のことを「おばあさんの家の孫娘」と呼んでいたが、町子に恋をすると名前が「女の子」としか呼ばなくなつた。九作にとって、町子は恋の対象となる「女の子」であることに間違いがない。

また、町子に恋をした九作と町子に恋をされた当八が会話を交わす場面がある。その際に、九作は「あなたですか、

小野町子が失恋をしてゐるのは」と当八に問う。それに対して当八は「さうです、多分、小野町子が失恋してゐるのは僕です」と答える。このように、当八は町子から慕われていたことを自覚していた。むしろ、自身の研究の一環として、そうなるように仕向けたとも考えられるだろう。当八にとつても、町子は自分に恋をする可能性のある「女の子」という位置づけだったということだ。

「第七官界彷徨」では町子が〈妹〉である面が強調されていたが、「歩行」、「地下室アントンの一夜」において、町子は恋をし、恋をされる「女の子」であることが強調されているようである。

第三章 尾崎翠的〈少女〉、〈妹〉像

第一節 尾崎翠的〈少女〉像

小野町子は〈妹〉であり、〈少女〉的存在でもあることを第二章で明らかにした。第三章では、他の尾崎翠作品の登場人物と小野町子をもとに、尾崎翠的〈少女〉、〈妹〉像について考察する。

「こほろぎ嬢」の主人公・こほろぎ嬢は、異国の詩人である「るりあむ・しゃあぶ氏」のことを知る。この「るりあむ・しゃあぶ氏」には「ふいおな・まくろおど嬢」という恋人がいるとされていた。「しゃあぶ氏」と「まくろおど嬢」

の恋は非常に熱烈であり、世間の人々の関心を惹いた。しかし、「まくろおど嬢」の姿を見たことのある者は「しやあぶ氏」以外誰もおらず、人々の興味は余計に募っていった。実際には「まくろおど嬢」は実在せず、「しやあぶ氏」の創り出した存在だったことが「しやあぶ氏」の死後に明らかとなる。「まくろおど嬢」は「詩人しやあぶの分心によつて作られた肉体のない女詩人」だったのだ。こほろぎ嬢は、この「ありあむ・しやあぶ氏」について知るために図書館に通っている。

「ありあむ・しやあぶ氏」は、実在したウィリアム・シャープ¹⁶というイギリスの作家である。実際にシャープは、フィオナ・マクラウドという女性名でケルト・ファンタジーの文学作品を書いていた。「しやあぶ氏」と「まくろおど嬢」が実在したことは確かだが、二人が恋人同士であったというのは尾崎翠の創作である。

こほろぎ嬢の容姿は、作中に描写がないために全く分からないが、こほろぎ嬢の服装は、色褪せた春の外套に、外套より古ぼけた手鞆である。しかも、右のポケットからは畳んだ洋服の端がはみ出してしまっている。「こほろぎ嬢の風姿は、それはあまり春の光景にあさはしいものではなかった」と語られる程だ。まず、〈少女〉が好むような服装ではない。それどころか身なりにかまっている様子が全

くない。こほろぎ嬢の姿は、〈少女〉的であるとは非常に言い難い。年齢も分からないが、既に学齢期は過ぎていて印象を受ける。

図書館の地下室の食堂には、熱心に勉強している女性がいた。こほろぎ嬢は、その女性は産婆学の暗記者だと勝手に思い込む。現実的な産婆学を学んでいる女性（あくまでもこほろぎ嬢の予想だが）に対して、自分は年中こほろぎのことや何の役にも立たないことばかりを考えていると比較する。そんな自分だが、生きていくために食べ物は必要である。こほろぎ嬢は生活費を田舎に住む母親に頼っているようだ。そのことに対して、こほろぎ嬢は母親に申し訳なく思っているようである。

こほろぎ嬢は、実在しない女詩人「まくろおど嬢」に「女詩人として生きてゐらした間に、科学者に向つて、一つの注文を出したいと思つたことはありませんか。――霞を吸つて人のいのちをつなぐ方法」と語りかける。生きていくために食べることは必要だが、こほろぎ嬢は度々食べ物について考えたくはないのだ。ましてや、親にも迷惑をかけたくはない。現実的な生活感のあることに悩まされたくないというのは、いかにも〈少女〉的な考えであるといえるだろう。

こほろぎ嬢は「ありあむ・しやあぶ氏」に恋をしたと作

中で書かれている。しかしどちらかと言えば、「ありあむ・しやあぶ氏」への恋心というよりも、「ありあむ・しやあぶ氏」と「ふいおな・まくろおど嬢」が同一人物であったことに関心があるように感じられる。こほろぎ嬢が「しやあぶ氏」に心惹かれたきっかけは、「しやあぶ氏」と「まくろおど嬢」の物語を読んだからだ。おそらく、「まくろおど嬢」の存在が無ければ、こほろぎ嬢は「しやあぶ氏」への関心はここまで強くはならなかっただろう。また、「まくろおど嬢」への問いかけを合わせて考えると、こほろぎ嬢は食べ物を食べる必要のなかった「肉体のない女詩人」のようになりたかったのかもしれない。

「第七官界彷徨」に登場する隣人の女学生も〈少女〉であろう。隣人の女学生は夜学の国文科の聴講生であり、昼間は炊事係でもあり、町子と同じく女中部屋に住んでいた。二人の交流が始まったのは、井戸端で町子が二十日大根を洗い、女学生が靴下を洗っていた時だ。二人はポンプを押す際に手伝いあったり、隣人が作業の邪魔になった町子の髪を束ねてあげたりと友好的だった。しかし、その際に会話は殆ど交わされなかった。二人の交流は主に文通で行われるが、二人とも手紙では非常に饒舌であり、感傷的でもある。第二章の第一節でも述べたが、この交流の仕方は〈少女〉的だといえるだろう。

また、わざわざ手紙で自分が黒い袴をはいている理由と本当は「海老茶いろの袴」をはきたいことを町子に伝える。海老茶色の袴は、女学生の象徴的な格好であった。隣人の女学生も〈少女〉らしく、その格好に憧れていたのだろう。こほろぎ嬢は、生きていくことの心配をする必要のなかった「ふいおな・まくろおど嬢」のようになりたいと考えていた。「第七官界彷徨」の隣人の女学生もスカートを二つつなぎ合わせた黒い袴ではなく、海老茶色の袴をはいて、女学生らしい女学生になりたかった。小野町子も人の「第七官」に響くような詩を書く詩人になりたいと望み、浩六の好きな詩人のような詩を書いてみたいと思う。

素敵なモノを前にすると「少女型意識」は「獲得したい」と思うのではなく、「成りたい」と思うのだと高原氏は述べている。ただ「獲得したい」という欲望は、卑しいものであり、「憧れの人のように成りたい」というのが「少女型意識」の「願望」なのだという。

尾崎翠的〈少女〉は、まさに何かを得たいと考えるよりも、何か自分の望むものになりたいという願望の強い〈少女〉であるようだ。

第二節 尾崎翠的〈妹〉像

「アップルパイの午後」^⑧には、小野兄妹と松村兄妹が登場

場する。小野は校友会雑誌に掲載されている妹の作文をきつかけに、女らしくしろ、恋をしろと妹へ説教する。妹の方は、同じ雑誌に掲載されている兄の恋人・松村雪子の作文をもとに兄をからかう。兄妹喧嘩をしているところへ、アップルパイを持った松村が現れる。松村は雪子から伝言を預かっており、小野と雪子の婚約が成立する。そして、最後には松村と小野の妹が恋人同士であることが分かる。

小野は自分の妹に対して、「すこしでも妹なみな妹だつたら誰が好んで打つものか」と告げる。小野の言う「妹なみな妹」とは、兄に口答えをしない従順な妹のことだろう。実際の小野の妹は恋している兄をからかい、従順には程遠い妹である。二人の父親は妹を「すこしでも女に近づけろ」と兄に命じている。父と兄は、妹の意向など無視し、まさに「庇護され、所有される性」に留めておこうとする。

小野は、自分の恋人の兄であり友人でもある松村と恋するように妹へ勧める。この行為について、川崎賢子氏は、「男たちの絆を深めるために交換される女性」として妹を扱おうとしていると指摘している。これは、小野だけでなく、松村にも言えることだろう。意識的にしろ無意識にしろ、二人の兄はそれぞれの妹を交換するような行動を起こしている。

小野は妹に恋をしろとしつこく説教するが、妹は兄の知

らないうちに松村と恋人同士であった。それも日曜日の午後にアップルパイでお茶をする習慣が二人の間で出来上がっている程の親しさである。妹は恋愛を推奨している兄にすら自分の恋を隠し通していたのだ。このように、妹は兄の管理下からこっそりと抜け出している。

「無風帯から」²⁰には、兄妹である「僕」と光子の関係性が書かれている。「僕」は光子に奇妙な感情を抱いていた。「僕」には、常に光子が「悲惨」という影を背負っているように見えていたのだ。それ故に、「僕」は「いくら愛しても愛し足りない愛」を彼女に与えていた。そして、二人揃って療養に向かった村で、自分達が異母兄妹であることを悟る。その後、光子の日記により、光子は「僕」の友人に心を寄せていることが分かる。「僕」は友人に妹を受け入れてやってくれと頼むのだった。

普段、光子と兄は「兄妹らしい親密さから離れた兄妹」であった。兄である「僕」は、光子だけでなく、他の家族とも打ち解けていなかった。しかし、青年になり、光子に関心を持つようになったが、長い習慣から親しむことが出来ない。

光子は病床の兄の傍へ付き添っているが、本を読んだり考え事したりと常に自分のことを行っている。兄の友達が見舞いに来ても、会釈をするだけで普段と変わりが無い。

しかし、兄に対して無関心というわけでもない。兄から帰郷しろと言われても、看病をすると頑固に東京へ残る。また、病気で弱っている兄の枕元で涙を流す。このように、光子は自分が兄の世話をするのは当然だと考えている。兄のように異性に対する愛ではないが、兄を家族として愛していることも分かる。

兄が自分に対して「切ない愛」を抱いていたことを光子は知っていた。兄は光子が異母妹であることを知り、自分の恋が成就すると感じていた。古代では、異母兄妹であれば近親相姦にあたらぬという考えがあった。⁽²⁾しかし、近代の家族ではそのようなことはありえない。光子が自分の友人に恋していると分かると、「僕」は友人と光子を結びつけようとする。「僕」は自分の恋が成就しないと分かると、妹を社会の婚姻システムに組み込むという兄としての役割を果たそうとするのだ。

「初恋」では、「僕」が盆踊りの輪の中にいた男装の少女に心を奪われてしまう。その男装の少女の帰る後ろ姿を追いつながら、初恋を感じていた。しかし、男装の少女が帰って来たのは、自分と同じ逗留先である。その男装の少女の正体は「僕」の妹だったのだ。

「初恋」の妹は、性格や容姿が全く分からない。しかし、勘違いだったとしても、「無風帯から」同様に妹は兄から

恋をされる。「無風帯から」とは違い、ユーモアのある作品になっていくが、兄妹における恋という点では同様のテーマが扱われている。

「アップルパイの午後」の妹は、兄が頭を打つためにヘアネットが頻繁に破れてしまう。そのため、妹は断髪にすることにした。小野町子は、三五郎が熱心に勧めるために断髪になった。二人とも兄や兄同然である従兄とのいきさつにより、女性性の象徴である長い髪を切ることとなる。

小野町子は兄や従兄達のために家事を行っているが、「第七官にひびくやうな詩を書いてやりませう」とひっそり人知れず考えていた。また、蘚の受粉や植物の恋愛について書かれた論文を読んだことを兄や従兄に黙っている。兄達は、町子に対して性や恋の話をタブー視していたようだが、町子はそのタブーを軽く越えているようである。

「アップルパイの午後」の小野の妹も事ある毎に兄から打たれて、女らしくしろと説教を受ける。家事も妹が担当しているようである。また、妹が校友会雑誌に載せる作文に対してまで「今後原稿紙に書いた字は一行だつて僕の検閲を経なければならぬ」と兄が口出しをする。一方で、妹は兄に対して果敢に自分の意見を述べて反論し、恋をしている兄を頻繁にからかう。しかも、兄の知らないうちに兄の友人である松村と恋人になっていた。

「無風帯から」の光子は、異母兄から異性としての愛を向けられるが、それに対して家族愛で兄を慕っている。光子の異性としての愛は、兄の友人に向けられている。光子と異母兄妹だと判明した後、兄は恋が成就すると思ったが、光子は兄のもとから離れ、東京へと戻ってしまう。

「初恋」の兄妹が普段はどういう関係だったかは作中から読み取ることが出来ない。しかし、妹が男装していた理由として、普段の自分とは違う自分になって盆踊りを楽しみたいという気持ちがあったとしてもおかしくはないだろう。そこに、家族の目から離れたいという気持ちがあったとしても不自然ではないはずだ。

尾崎翠的〈妹〉は、一見「庇護され、所有される性」であるかのように見えるが、実際は兄の庇護のもとから抜け出そうと努力している〈妹〉なのだ。

おわりに

「第七官界彷徨」の初出は「私の生涯には、ひとつの模倣が偉き力となつてはたらいてゐはしないであらうか」という一文で始められている。この一文は「新興芸術研究」（刀江書院 昭和六（一九三二）年）に加筆掲載される際に削除されたものだ。この一文が削除されたことは尾崎翠の自作解説「第七官界彷徨」の構図その他²⁴に書かれているが、

削除した詳しい理由は書かれていない。ただ、この冒頭部分には、最後の場面を暗示する大事な役目があったのだと尾崎翠自身が述べている。この部分を削除したことによって、「第七官界彷徨」の結末は変化したのだという。

尾崎翠的〈少女〉は、何かになりたい願望や憧れが強い〈少女〉である。何かになりたいと思うと、その憧れている対象の真似から始めるのが最も一般的であり、憧れの存在へと近づく第一歩だと思われる。だからこそ、浩六の好きな異国の女詩人が好んで書いていた「風や煙や空気の詩」を町子も書きたいと思ったのだろう。「まくろおど嬢」のようになりたかったこほろぎ嬢も、とある詩人に憧れ、そのようになりたいと考えたからこそ、まず詩人について調べることから始めたのだろう。それゆえに、自分の憧れる存在が有名でなかったことに落胆したのだ。

自分が憧れる存在のようになりたいという〈少女〉の願望は、その存在の真似をする行動につながる。つまり、その存在の「模倣」をすることだ。初出の「第七官界彷徨」の町子の生涯には「ひとつの模倣が偉き力」として働いていたのだ。削除されてなくなった部分とはいえ、この「ひとつの模倣が偉き力」というのは重要な考えだったのだろう。自分が憧れる存在のようになりたいという願望の強い尾崎翠的〈少女〉にとつて、まさに「模倣」は「偉

きい力」だったのではないかと考えられる。

尾崎翠的〈妹〉は、兄に「庇護され、所有される性」であるかのように見えるが、実際は兄の所有から抜け出そうとしている存在である。その抜け出す方法は、恋であったり、勉強であったり、詩作であったりと様々だ。

尾崎翠は、七人兄妹の四番目に生まれ、兄が三人、妹が三人であった。つまり尾崎翠は妹でもあり、姉でもあったのだ。亡くなった末の妹の子供の面倒をみており、晩年は妹夫婦と一緒に暮らしていた時期もあった。伝記的事実をみると、尾崎翠自身にはどちらかといえば姉のイメージが強く感じられる。

しかし、尾崎翠の作品に登場するのは〈妹〉が多く、その〈妹〉達は印象的な存在となっている。また川村湊氏は、「第七官界彷徨」は「⁽²⁵⁾妹」の立場から書かれた「妹」の文学にほかならない」としている。このように尾崎翠の作品は、〈妹〉の文学である印象が強い。そこには、翠自身が〈妹〉という立場に強いこだわりがあったのではないかと考えられる。翠自身も、作家となることによって、「庇護され、所有される性」から抜け出したかったのかもしれない。姉でも妹でもあった尾崎翠にとって、〈妹〉という存在は特別な思い入れのある文学モチーフであったことに間違いないだろう。

尾崎翠作品の本文引用は全て稲垣眞美編『定本 尾崎翠全集』全二巻(筑摩書房 平成(一九九八)年九月)に拠った。

注

- (1) 初出は、「文学党员」(アトラス社 昭和六(一九三二)年二月三月号)に掲載。既発表部分に改訂を施した全文を自作解説「第七官界彷徨」の構図その他」とともに板垣鷹穂編「新興芸術研究」第二輯(刀江書院 昭和六(一九三二)年)に掲載。
- (2) 初出は「家庭」(大日本聯合婦人会 昭和六(一九三二)年九月号)に掲載。保高德蔵編「文学クオタリイ」(大盛堂書店 昭和七(一九三二)年二月)に再録。「歩行」には、「第七官界彷徨」と同じ小野一助の名前が出てくる。語り手の名前は明記されていないが、「地下室アントンの一夜」をふまえると、「歩行」の語り手が小野町子だと分かる。
- (3) 初出は、「新科学的」(新科学的社 昭和七(一九三二)年八月号)に掲載。「歩行」とリンクした作品。
- (4) 初出は、栗原潔子編「火の鳥」(火の鳥編輯所 昭和七(一九三二)年七月号)に掲載。「歩行」、「地下室アントンの一夜」に登場した幸田当八の学説が作中で紹介されている。
- (5) 本田和子「女学生の系譜 彩色された明治」青土社 平成二(一九九〇)年七月
- (6) 川村邦光「オトメの祈り 近代女性イメージの誕生」紀伊國屋書店 平成五(一九九三)年十二月
- (7) 今田絵里香「少女」の社会史 双書ジェンダー分析17

頸草書房 平成十九(二〇〇七)年二月

- (8) 初出は、「少女画報」(東京社 大正五(一九一六)年七月)に掲載。今回の引用は、吉屋信子『花物語』上巻(国書刊行会 昭和六十(一九八五)年五月)に拠った。

- (9) 高原英理『少女領域』国書刊行会 平成十一(一九九九)年十月

- (10) 日本国語大辞典第二版編集委員会『日本国語大辞典』第二版 小学館 平成十二(二〇〇〇)年十二月

- (11) 初出は、「婦人公論」(中央公論新社 大正十四(一九二五)年十月)に掲載。今回の引用は、『現代日本文学大系20 柳田國男集』(筑摩書房 昭和四十四(一九六九)年三月)に拠った。

- (12) 川村湊「妹の恋 大正昭和の少女文学」、初出は「幻想文学」二十四号(幻想文学出版局 昭和六十三(一九八八)年十月)に掲載。今回の引用は川村湊『異端の匣』(インパクト出版会 平成二十二(二〇一〇)年三月)に拠った。

- (13) 山下聖美「〈妹〉というキャラクターその系譜から、宮沢賢治、尾崎翠の作品をめぐって」、『日本大学芸術学部紀要』第四十九号(日本大学芸術学部 平成二十一(二〇〇九)年三月二十日)に掲載。

- (14) 大塚英志『妹』の運命 萌える近代文学者たち』思潮社 平成二十三(二〇一一)年一月

- (15) 川村湊「妹の恋 大正昭和の少女文学」、初出と今回の引用は注十二と同様。

- (16) ウィリアム・シャープ William Sharp (一八五五・

一九〇五)は、スコットランド出身の詩人・小説家。シェ

リーやハイネなどの伝記を手掛けた。フィオナ・マクラウド Fiona MacLeod の女性名でケルト・ファンタジーの作品を発表した。しかし、シャープが亡くなるまで、この事実は公表されなかった。フィオナ・マクラウドを日本に広めたと思われるのが、歌人・翻訳者として知られる松村みね子(片山廣子)だった。尾崎翠自身、ウィリアム・シャープに強い関心があった。「神々に捧ぐる詩」(「曠野」昭和八(一九三三)年十一月号)という作品がある。この作品は題名の通り、尾崎翠にとつての神々に捧げられたものであり、「チャアライ・チャップリン」と「キリアム・シャープ」の二篇の詩で成り立っている。その詩の中で、翠はシャープのことを「文学史から振りおとされた」詩人であると同時に「分裂詩人」と評している。

- (17) 注九に前掲。

- (18) 初出は「女人芸術」二巻八号(女人芸術社 昭和四(一九二九)年八月号)に掲載。

- (19) 川崎賢子『尾崎翠 砂丘の彼方へ』岩波書店 平成二十二(二〇一〇)年三月

- (20) 初出は「新潮」三十三巻六号(新潮社 大正九(一九二〇)年一月)に掲載。

- (21) 大塚民俗学会編『日本民族事典』(弘文堂 昭和四十七(一九七二)年二月)によると、「遠い昔にさかのぼると、禁婚親の範囲は現在よりせばまっているのが記紀などにかがえる。古代の皇室や貴族の系譜においては、伯父姪婚も異母

なれば兄妹婚も忌避されず、すなわち、三親等以内の近親者間の婚姻は稀有のことではなかった」とある（松岡利夫「近親結婚」の項）。

(22) 初出は、水守亀之助編集『随筆』第二次二巻七号（人文会出版部 昭和二（一九二七）年七月）に掲載。

(23) 今回の引用は、KAWADE道の手帖『尾崎翠 モダンガールの偏愛』（河出書房新社 平成二十一（二〇〇九）年六月）に掲載されているものに拠った。

(24) 初出は、注一を参照。

(25) 川村湊「妹の恋」大正・昭和の「少女文学」、初出と今回の引用は注十二と同様。

【参考文献】

- ・稲垣眞美編『定本 尾崎翠全集』全二巻 筑摩書房 平成（一九九八）年九月
- ・本田和子『女学生の系譜 彩色された明治』青土社 平成二（一九九〇）年七月
- ・川村邦光『オトメの祈り 近代女性イメージの誕生』紀伊國屋書店 平成五（一九九三）年十二月
- ・今田絵里香『少女』の社会史 双書ジェンダー分析17 頸草書房 平成十九（二〇〇七）年二月
- ・吉屋信子『花物語』上巻 国書刊行会 昭和六十（一九八五）年五月
- ・高原英理『少女領域』国書刊行会 平成十一（一九九九）年十月

・日本国語大辞典第二版編集委員会『日本国語大辞典』第二版 小学館 平成十二（二〇〇〇）年十二月

・『現代日本文学大系20 柳田國男集』筑摩書房 昭和四十四（一九六九）年三月

・川村湊『異端の匣』インパクト出版会 平成二十二（二〇一〇）年三月

・山下聖美「〈妹〉というキャラクターその系譜から、宮沢賢治、尾崎翠の作品をめぐる」と、「日本大学芸術学部紀要」第四十九号 日本大学芸術学部 平成二十一（二〇〇九）年三月二十日

・大塚英志『妹』の運命 萌える近代文学者たち』思潮社 平成二十三（二〇一一）年

一月

・フィオナ・マクラオド／松村みね子訳『かなしき女王』沖積舎 平成二（一九八九）年九月

・川崎賢子『尾崎翠 砂丘の彼方へ』岩波書店 平成二十二（二〇一〇）年三月

・大塚民俗学会編『日本民族事典』弘文堂 昭和四十七（一九七二）年二月

・KAWADE道の手帖『尾崎翠 モダンガールの偏愛』河出書房新社 平成二十一（二〇〇九）年六月

・稲垣恭子『女学校と女学生 教養・たしなみ・モダン文化』中央公論新社 平成十九（二〇〇七）年二月